

ネパールから

サマッタだより



反差別草の根交流の会「サマッタ」ニュースレター

VOL.3 (2015年3月31日発行)

報告：サマッタ第二回総会と2014年度第一回学習会

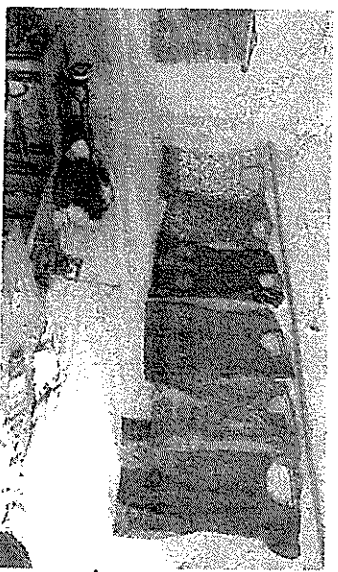
サマッタ第二回総会を、2014年8月31日、NPO法人伊丹人権啓発協会（「おるか」の会）で開催しました。参加者は会員8名。会員の小さな子どもたち3名も参加してくれました。

議案書に沿って、2013年度活動報告から始めました。サマッタの主な活動の10+2就学支援事業で支援をした学生は5名でした。（サマッタだよりVOL.2で紹介）入学金・授業料・学内定期試験の受験代・図書費・制服代等、学校に納める費用を送りましたが、基金会員が33名になって安定した支援ができました。学習会は二度行い、報告はサマッタだよりVOL.2と3に掲載しました。どちらも、グループ化時代と無縁ではない内容でしたが、カタールで、昨年だけで184名のネパール人出稼ぎ労働者が亡くなったというショッキングなニュースも流れています。2022年のサツカー・ワールドカップの試合に向け、ひどい労働環境と異常な暑さのもとで、ネパール・インド・パキスタン・フイリピン等から来た多くの労働者が働いているそうです。翻って、日本社会で暮らす、働く外国人の人権はどうでしょうか。私たちが一人ひとりはその実態を知っているのか、何ができるのか等、自分の問題として考えなければいけないと思います。今年度も、10+2就学支援事業と学習会を引き続き行っていきたいと思います。

総会終了後、今年度第1回目の学習会を開催しました。講師は、ムク・マヤ・タマソンさんです。ムクさんは、カトマンズから車で約3時間のバジラネイ県カブレランチョーク郡マンカルタールVDCピントリ村の方です。今年の4月から、神戸のNGO「PHD協会」の研修生として来日中で、スタツプの井上理子さんと一緒に来られました。ムクさんが結婚して来た頃のピントリ村は、家長長制が色濃く、女たちが挨拶も発言もできなかったそうです。それを変えたいと、6、7年前、7人の女性で「サマツン・チャルマソ」というグループを作り、ムクさんは副代表

です。グループには若いも若きも村の女性たちのほとんどが参加し、政府からの助成金制度も利用しながら、村をよくするために活動を進めています。長年、男たちは賭けトランプ遊びをし、女たちが畑仕事や育児等のすべてをこなし、妻の労働収入までも夫が取っていたけれど、今では遊んでいる男はいなくなつて、女性と一緒に仕事をしている男はいます。子どもたちの進学率もアツプ、女の子たちの進学も増えてきたそうです。

ムクさんは、毎日村の小さな洋服仕立て屋で働いています。1着を1.5〜2時間くらいで縫い、200円くらいの収入です。2年前から店の裏に住んで、朝の5、6時から夜まで仕事をしています。店が休みの日には非識字の人に文字を教え、ワードに一人いる葉を配布するボランティアもしているそうです。（写真は、ムクさんのお店）



現在受けている研修では、ホームステイをしながら、洋裁・手芸はもちろん、保育・障害者・高齢者の施設、農家などで多くのことを学んでいます。「今のネパールではまだ問題になっていないけど」と言いながら、高齢者介護問題に強い関心を持たれ、「帰国後は、子どもの健康や栄養面での指導もしたい」等、大変じょうずな日本語で、意欲的に話されました。次回は、ぜひネパールでお会いしましょう。



報告 「ネパール人移住労働者の現状」

～ネパールから見て、日本から見て～
講師：南真木人さん (国立民族学博物館准教授)

2014年3月16日の午後、伊丹人權啓発協会「おるか」事務所にてお話を聴きました。

ネパールでは、1995/6年から2003/4年の間に貧困人口率は42%から31%に減少し、また子どもの死亡率や児童の登校率なども、以前に比べると大幅に改善しました。この背景には、外国に出稼ぎに行った人からの送金が増えているということがあります。送金が国内総生産(GDP)に占める割合は12%で、その額は政府開発援助(ODA)を上回ったと報告されています。

渡航先はインドが最多で、続いてカタール、マレーシア、サウジアラビアとアラブ首長国連邦で大半を占めています。日本に住むネパール人も毎年著しく増加しており、2012年末は24,069人(法務省統計)で、在留外国人数の第10位になりました。1990年は447人だったので、この12年間で、約54倍にもなっています。ネパールは、「移民大国」になってきており、それにともなつて社会も急激に変化してきているのです。

南先生がネパールで長年調査に入っている村からも出稼ぎに行く若者が増えており、その事例からは、現在は人材派遣会社ではなく、個人のツテを通じて外国の出稼ぎを斡旋するシステムが浸透してきていること、それによって渡航に係る諸経費も安くなるため貧しい世帯からの移民を可能としているということでした。しかし、中東などの労働現場は過酷な労働環境も多く、賃金もネパールの法律(外国雇用法)で最低賃金を設けているものも実際は守られていないこともあり、待遇の改善にはまだ課題が残るようです。また、統計こそ出ていないものの、この2～3年で女性の出稼ぎも増加しており、それに伴う問題も顕在化しています。

移民がネパールにもたらす文化的影響は大きく、村では出稼ぎに行った人からの携帯電話による情報や帰国した人からの情報を通じて、貨幣感覚や消費の動向、労働観、家族観などに影響を与えています。これらの影響を受けた若者が出稼ぎを選ぶか、高等教育への進学などを選ぶかはまだわかりませんが、階級の変動はあまり期待できないのではないかと、ということでした。というのも、学歴などが限られる村の青年が就くことの出来る職種は最低賃金の建設現場などに限られるからです。そして、安価な労働力としてグローバルな経済に包摂されていくという懸念もあります。

日本では、現在1000以上あるインド料理・ネパール料理のレストランで就労するコックや、その家族、日本語学校への留学生が急増しています。コックである父親が妻子を呼び寄せることで、子どもの教育問題が浮上している中、昨年東京に日本初のネパール人学校も設立され、有志で運営しています。

現在、技能をもつコックや資金のある留学生が日本におけるネパール人の多数派となってきました。そうした初期の条件を持ち合わせていない民族の人は減少しており、高位カーストの人が増加傾向にあります。技能実習生として来日する人も少なくなく、過酷な労働環境も報告されています。その他、難民申請者が急増(2012年の申請者数320人)していることから、在留ネパール人の様々な課題が見られます。

講演の後には質疑応答が行われました。ネパール政府の対応や、ネパール社会の中での移住労働の捉えられ方等、活発に意見交換がなされました。私たちは、周りに増えてきている外国人の社会的背景や外国人が日本において抱えている課題を認識すること、そして、外国人にとつてより住みやすい社会とはどのような社会なのかを考えながら、変えていく努力をする必要があることを、改めて感じた講演会となりました。

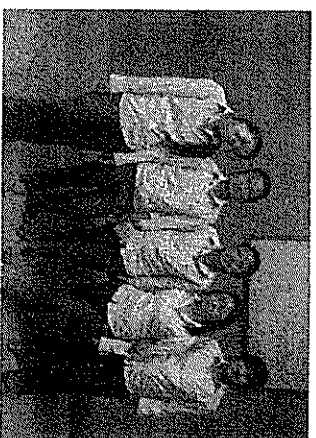
< 報告 > 5名の奨学生を訪ねて

昨年の5月、ネパールを訪問した機会を利用して、サマンダが支援している5名の学生たち（サマンダよりNo.2に掲載）に会いに行きました。もう一年近く経ってしまい、12年生になったばかりだった3名の奨学生たちは、今、卒業試験にがんばっているそうです。少しでも、奨学生たちの様子をお伝えできればと願いつつ、報告いたします。

奨学生たちの学校があるKatunje Basain村まで、乗り合いバス利用では日帰りできず、車をチャーターすれば費用負担が大きく、やむを得ず、カトマンドウから片道約3時間、サグンのスタツフのサルバジツトさんのオートバイに乗せてもらって、恐る恐る出かけて行きました。

カトマンドウの街中もリンダ・ロードも、あちこちで道路拡張工事中。土煙が舞っていました。トリブヴァン空港のそばを東方へと街を出て行く道路には驚きました。チベツトまで行けるといいう、日本のODAで造られたアルニコ・ハイウェイです。「日本のハイウェイと同じでしょう」とサルバジツトさんが言われましたが、本当にすばらし道路です。旧王宮バクタブル観光に行く人も、ここを通ります。さらに走ってボウリケルからは、南のインドトに向けて新しく伸びているシンドゥウリ・ハイウェイに入りました。これも、日本のODAによって造られているそうです。いくつも山を登ったり下ったり、一部工事中の所もありましたが、とにかく無事に村に到着できました。

村はカトマンドウより南のため、すでに大分暑くなっています。Shree Roshi Higher Secondary schoolで待ってくれていた5名の奨学生は水色のシャツに紺色のズボン、ネパールの公立学校の制服姿です。一緒にすべそばの小さな茶店でダルバートを食べ、教室へ移りました。前年、神戸のPHD協会に研修生として来日されたプレム・ドジュ・ラマさんが通訳として付いてくださいました。みんな、朝の4時か4時半に起きて、5時前後に家を出て、約1時間半かけ、徒歩で通学しています。家は学校の向かいに見える高い山の向こうにあるそうです。全員サンダル履きでしたが、来る時は細い山道を下り、帰りは登ります。5年生までは家の近くの学校へ通い、6年生から兄弟たちと一緒にこの学校に来ているそうです。私は何度か山を見上げましたが、登って行ってみようか



みんなよく笑っていました。

という気持ちにはとてもなりませんでした。冬の早朝はまだ暗く、山道の状態も悪いと言っていました。それでもこの子たちは何年間もこの山を越えて通学しているのです。「勉強するのは楽しく、学校に来るのが楽しみだ」と笑いながら言う彼女たちの方に圧倒されました。

授業は6時半から10時までで、その後、家に帰ってダルバートを食べ、宿題などをするそうです。「夕方、お母さんと二人で山に水牛や牛の草を刈りに行って、いろいろ話をするのが楽しい。山には野イチゴなどの果物もある。寒い冬でも、たくさん仕事をすれば身体が温まる」と言ったのは、5人の中で一番積極的だったラサリさんです。みんな、小さい時から草刈りの手伝いをしていて、鎌で切った手の切り傷を「ここ！」「これ！」と言いながら見せてくれました。ジュニーさんは大きな傷を見せながら、「このケガをした時はボウリケルの病院に行った」と言いました。すごく大変な時はカトマンドウの病院まで行くそうです。が、それにしても、まず車が来れない山の上の村の家から道路まで出なければなりません。その時、ジュニーさんはどんな気持ちだったのでしょうか。私は日本のODAを懐疑的に見えますが、村の生活には、やはり道路が命綱でしょう。また、全員、家の夕食のダルバートを12、13歳くらいから作ってきたそうです。中には8、9歳から作っているとゆう子もいました。家には冷蔵庫や洗濯機はもちろんなく、テレビがない子もいました。そして、夜は9時か10時頃には寝るそうです。

村での生活は、子どもたちにとってもいろいろと大変なことがあるなあと思いました。しかし、みんな明るく、たくましく、私の方が元気をもらいました。早く会員の方々と一緒に訪ねたいなあと思います。帰路に就きました。(KN)

■ 会員コーナー ■

子どもたちの未来



2006年の初めてのネパールスタディツアー参加から、8年半が過ぎました。これまで3度ネパールを訪れ、様々な環境、生活背景で暮らす人々と出会ってきました。その中でも印象として強く残っているのは、やっぱり子どもたちの姿です。学校まで毎日片道1時間以上の山道を通う子ども。識字力のない村の大人や子どもたちに文字を教えるためのフリースリテーター研修を受ける子ども。解体された水牛の骨や皮の上で水浴びをしている食肉カーストの子ども。貧しさのためにやせ細り母の腕の中に抱かれていた子ども。ネパールという国の子どもがすべてこういう生活なわけではないけれど、あまりにも貧富、性別、カーストによる生活、就労、就学の格差がありました。

私にも子どもが生まれました。2歳4カ月になります。親として切に願うのは、ありきたりですが子どもの幸せです。子どもへの親が決めるものではなく、子ども自身が幸せだと実感できることです。そのためには様々な経験や知識が不可欠だと思います。教育という場は必要最低限の基礎学力を学ぶと同時に、様々な経験や知識を学び、個々の感性を育てていく場だと思います。子どもたちができる感性を育てていけたら...と思っています。サマソタも就学支援をしています。財源も今のところ会員会費だけで多くの子どもへの支援はできません。しかし、一人でもサマソタの就学支援を受けた子どもたちが、将来自分の夢の実現をめざせる支援になればいいなあ...と思います。(斧田哲紀)

コラム 「日本の中のネパール」(3)

今回は、大阪に住むネパール人女性Nさん(21歳)を通じて考えてみたいと思います。

Nさんのお父さんは、10年前にインストラクターのワークとして来日。長男が12年生(10+2)を卒業したのを機に、妻と子ども3人をネパールから日本に呼び寄せました。当時、お兄さんは18歳、Nさんは16歳、妹は7歳でした。兄は日本語を学んだあと大学に進学。Nさんは夜間中学で日本語を学んだ後、アルバイトをしながら家計を助け、家事をしています。母は来日直後からホテルのベッドメーカーキングの仕事をしていましたが、一番下の子にはネパールでしっかり教育を受けさせたいと言って、妹を連れて来日2年後にネパールに帰国しました。ただ一人の「息子」である兄は、親の期待を一心に受けて大学に進学し、エンジニアの勉強をしています。Nさんはこれから何をしたいのかが見つからず、悶々としています。

Nさんのように、親に連れられて漠然とした期待を抱いて来日したものの、日本語の壁があるために安定した就労先も見つからず、目標もなく毎日を過ごしている若者は少なくありません。外国人の子どもや若者も夢を持って、生まれや経済力に関係なく自分の能力が十分に発揮できる日本社会であってほしいと願っています。(山)

【編集後記】

一年ぶりの「サマソタだより」になってしまい、大変申し訳ありません。

強引に「戦争をする国」へと突き進み、70年前の戦争犯罪にも4年前の原発事故にも誠実に向き合う勇氣を持たない政治家たち。彼らは、外国人労働者の受け入れを拡大すると言うけど、「戦争をする国」で、安心して働き、幸せに暮らしてもらえると、到底思えない。(K)

サマソタだより VOL. 3

発行年月日：2015年3月31日

編集・発行：反差別草の根交流の会「サマソタ」

連絡先：兵庫県伊丹市平松7-1-16 山本方

E-mail: samanta_sgjid@yahoo.co.jp

URL <http://www.samantajapan.jimdo.com>